

長野県革新懇ニュース

2021 年 10 月号
発行日 10 月 10 日
会費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振替 00510-3-15971

268

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 小池由美子さんインタビュー
2 面 1 面続き、「近現代信州の歴史回廊」小平千文さん
3 面 「時代遅れのリニア新幹線は断念すべき」春日昌夫さん
読者の声、漢字パズル
4 面 雨よ降れ「パンデミックの作家たち」窪島誠一郎さん
写真で辿る信州と戦争「敗戦二日前の空襲」北原高子さん
映画評論『東京クルド』内山到さん

長野県革新懇

検索



埼玉県生まれ。早稲田大学教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科修士課程終了、埼玉県立高校国語科教諭、日本高等学校教職員組合書記次長、副委員長、2019 年 10 月から現職。著書『学校評価と四者協議会』同時代社、編著書『新しい高校教育をつくる』新日本出版他

3%が立ち上がれば 社会を変えられる

小池 由美子さん

(上田女子短期大学専任講師)

コロナ禍のもと 学生にも大きな影響

Q 新型コロナの感染拡大は学生にどのような影響を及ぼしていますか？

全国でコロナ感染が急拡大し、各方面で深刻な影響が生まれていますが、幸い本学は少人数授業ですので、感染対策を徹底することによって対面授業を割と早く再開することができました。去年は4月の入学式とオリエンテーションの直後から休校措置に入ってしまったのですが、6月初旬から少人数のゼミなどで対面授業を徐々に再開し、6月の末にはほぼ全面的に再開することができました。今年度はずっと対面授業をやっていますが、活発な意見が交わさるのでやはり対面でのやりと

りは大変だと感じています。一方で、学生生活の面ではアンケートを取ると切実な状況が出てきます。私もゼミ生に尋ねてみましたが、ある電車通学してくる学生は、駅前のお店でアルバイトを始めたけれども、コロナの影響でほとんどなくなってしまったとのことです。

実は、短大の方でもアルバイトについては十分注意してほしいというメッセージを発しています。その代わりに本学の中でできることはないかということ、例えば体育館の清掃であるとか、簡単な事務で学生アルバイトを募集しました。そうした中で学生は本当に切実な状況を訴えています。夏休み中には長野県の緊急学生支援で食料品などが本学の希望する学生にも支給されました。長野大学さんとも共同して学生にこの事業を呼びかけました。10月からは上田市の社会福祉協議会が学生支援で食料品などを支給してくださり、学生には遠慮しないで是非来てくださいという呼びかけをしています。

学費の引き下げなど 公的支援の拡充を

Q 学生に対する公的支援の状況はどうでしょうか？

もとより西欧諸国に比べきわめて高額な学費の軽減を図ることが重要で、この迅速な対応が1丁目1番地です。さらに、給付制奨学金制度が始まりましたが、きわめて不十分でその改善が必要です。この制度では奨学金を受給できる学生はごくわずかであるこ

とに加え、年収が400万円後半ぐらいの家庭が、逆に給付制奨学金を受けられなくなってしまう状況があります。ですので、もっと高等教育に対してOECD並みに財政支出を増やしてほしいと思います。コロナの感染が拡大して、学生が大学に行けなくなると、ネット上で授業料返還を求める署名が起りました。それは、学生の気持ちに立つと当然だと思います。オンライン授業になっても、質が低下しているということ、学生が言っていますけれども、こちらとしてもオンラインでいくら頑張っても、やはり対面とは違うということは感じます。一方で、大学側も施設設備で相当な費用がかかっているわけで、そういうことに対して国として補助をすることができないのかと感じています。

まだまだ遅れている ジェンダー問題

Q ジェンダー問題などについて意見を聞かせください。

ジェンダー問題については近年、社会的注目を浴びていますが、平等という視点からはまだまだ遅れているというのが実感です。私が大学を卒業した1年後に「男女雇用機会均等法」が成立しましたが、差別は歴然として存在しているわけです。とりわけバブル崩壊後、一番のしわ寄せを受けたのは女性だと思っています。90年代の半ば以降の雇用の流動化政策のもとで非正規雇用が急激に拡大していきましたが、正規雇用から真つ先

には引き出されたのが女性であり、非正規雇用かつ低賃金でしか働けない状況が広がりました。そうしたなかで、女性のホームレス化ということが言われますけれども、それは当然の帰結と言えます。

私が埼玉の高校で教えていた時ですが、それほど困難高校ではありませんでした。高校を中退していくとか、あるいは在学中に妊娠をするとか、あるいは父子家庭と一緒に父親と暮らせなくて友達の家で転がり込むような状態の生徒も見てきましたので、彼女らが高校卒業あるいは中退した後どういう人生を送れるだろうか考えた時に、胸が痛むものがありました。今考えると、特に女子生徒はホームレスの予備軍になる可能性があるのではないかと心配しています。こうした問題に根本からメスを入れるには、政治を転換していかなくてはならないということを感じます。

女性が生きにくいということ、男性も生きにくいということだと思っています。女性の権利が保障されていないというところは、男性の権利も同じように保障されていないということに気付いていただきたいと思います。先月、小田急線で「幸せな女性を殺してやりたかった」という事件が起きて、「フェミニサイド」と言われていますが、そうした言葉が生まれることがあってはならない。それは、社会から弾き出された男性が生み出した概念でもあると思います。結局のところ、生きにくさが極まって、ああいう事件が起きたといえるのではないのでしょうか。

働くことを通して 自己実現を図るべき

Q ジェンダー問題を解決していく上で何が必要でしょうか？

やはり労働のあり方が大きいと思っています。未婚女性にどういう人生を歩みたいかというアンケートを行ったところ、専業主婦になりたいという回答が非常に増えているわけです。なぜそうした結果になったかというと、それだけ女性の働く環境が厳しいからだと思います。低賃金で長時間労働である。例えば以前教えていた高校時代の母子家庭の姿を見ると、お母さんがダブルワーク、トリプルワークしている。そういうのを見て、働く女子高校生は、こんなに働きたくないと思うわけです。結婚して夫にそこそこの収入があれば、あんなにあく